

# 西洋古典学フォーラム「夢」

趣旨説明・司会

南川 高志（佛教大学）

報告

河島 思朗（京都大学）

早瀬 篤（京都大学）

中村 るい（東海大学）

木原 志乃（國學院大學）

藤井 崇（京都大学）

津田 謙治（京都大学）

全体討論

2022年6月4日（土）

日本西洋古典学会 第72回大会

於 京都大学

主催 日本西洋古典学会

共催 京都大学文学研究科

協賛 西洋古典学連携共同研究会

## (趣旨説明)

西洋古代における夢概念の分析は、西洋古典文学、哲学、歴史学、そして宗教学など、隣接するさまざまな学問領域において研究がおこなわれている。しかしながら、相互に有機的な結合をうながす視点や研究手法にかんする議論はいまだ十分におこなわれているとは言えない。とくに、それぞれの研究分野において複合的な学問領域に関連する資料をあつかう場合や、近接する学問領域において古代のテキストをあつかう場合、上記のような議論の重要性が認識される。本フォーラムは、このような問題背景をふまえて、西洋古代のさまざまな文献や史料に見られる夢概念を、西洋古典学を主軸として、多様な学問領域から統合的に分析しようと試みる。そして古代のテキストで語られる夢概念を、民間伝承や神話、哲学、医学、芸術学、碑文研究、宗教学など隣接する学問領域の研究手法を相互的に用いつつ考察すること、さらには全体討論をとおして新たな総合的視座の構築に寄与することを目指す。

## (報告要旨)

### 叙事詩における夢見の描写

河島 思朗 (京都大学)

本発表は西洋古典文学の観点から夢を論じる。文学作品のなかに描かれる夢についてはいくつかの種類に分けられるが、叙事詩においては神々や亡霊が夢のなかに現れ預言や予兆を伝えるパターンが多い。夢は真実を告げる媒介とみなされている。本発表は叙事詩で語られる夢見の場面の典型的な描き方を理解するとともに、その典型を利用あるいは逸脱する夢の描写に着目することで、物語における夢見の場面の役割を考察する。具体的にはホメロス『イリアス』『オデュッセイア』、ウェルギリウス『アエネイス』、オウィディウス『変身物語』に描かれる夢見の場面を取り上げる。

『イリアス』『オデュッセイア』における夢見の描写は、のちの叙事詩につづく基礎、つまり典型的な表現や場面構成を作り出している。『アエネイス』

や『変身物語』はその伝統を受け継ぐものであり、作品のなかでいくつもの夢場面を描き出している。本発表はこのような夢場面の典型を確認したうえで、それぞれの作品における差異をも明らかにしたい。典型的な表現や描写など、共通項を有するがゆえに相違点も浮き彫りになる。この差異は作品の性質の違いに起因するものであるために、それぞれの作品理解ともむすびつくであろう。また、典型的な描写から逸脱した場面にも着目する。とりわけ『オデュッセイア』第19巻の「ペネロペイアの夢」、『アエネイス』第6巻の「夢の門」、『変身物語』第11巻の「眠りの神の館」について、夢の門の描写を軸に考察したい。以上の議論を通じて、叙事詩における夢の描写や文学的な工夫を垣間見ることを目指す。

プラトンは夢が未来を予言することを認めるか？

早瀬 篤（京都大学）

古代ギリシア哲学における「夢」という現象をめぐる思索は「人は夢を通じて未来を知りうるのか」という問題と不可分な関係にあり、次のような思索の系譜が描き出せると一般的に認められている。つまり、前7世紀以降いわゆる「オルペウスの伝統」の影響下で知識人たちは夢が未来を予見する力をもつと信じたが、前5世紀頃の知的運動のなかでこの信仰に批判や懐疑の目が向けられるようになり、それは夢を見る原因を純粹に生理学的に説明しようとするアリストテレスの著作のなかで結実するのだ、と。しかしこの系譜においてプラトンの見解をどのように位置づけるべきかは定かではない。一部の学者たちは、キケロに倣って『国家』571c3–572a9を引用しつつ、夢と預言の問題に関してプラトンはオルペウ斯的伝統に組すると考える。しかし別の学者たちは、プラトンによる「覚醒状態」(ὕπαι)と「夢見状態」(ὄναρ)との対比(cf. e.g. *Rep.* 476c7–d2; *Plt.* 278e4–10)や、体内の動と夢との関連づけ(*Ti.* 45d7–46a2)を考慮して、それを否定している。そこで本発表では改めてこの問題を考え直してみたい。

私は、関連箇所を再検討した上で、それぞれの立場を記述する仕方を少し工夫することで、夢をめぐる思索の系譜のなかにプラトンを明確に位置づけ

られると提案する。一方で、オルペウ斯的信仰に賛同する知識人たちの立場は次のものであるとしよう。

(D1) 未来を予言する夢が存在し、人は夢を使って未来を知りうる。

これに対してアリストテレスの立場は次のように記述できる。

(D2) 未来を予言する夢は存在しない。

このときプラトンの立場はこのどちらでもなく、むしろ次のようになる。

(D3) 未来を予言する夢は存在するが、人は夢を使って未来を知りえない。

プラトンは未来を予言する夢の存在を認め、眠る前の心の状態が適切なときに人はそのような夢を最も頻繁に見ることになると考える。しかしプラトンは同時に、人は預言的な夢を見ているまさにそのときにその夢の意味を判別できない、と考えるので、人は夢によっては未来を知りえないという立場をとることになるのである。

### ギリシア美術における夢と眠りの表現

中村 るい（東海大学）

本報告は、ギリシア美術における「夢」の視覚化について検討するものである。ギリシア美術史学の分野で、「夢」の視覚化表現は、管見のかぎり、これまで体系的に研究されていないように思われる。それは、「夢」の場面と確実に判別できる作例が限られているからではないだろうか。

「夢」の場面は、夢の中で神と出会う、神から助言を受ける、など、神の顕現（エピファニー）と関連することが多い。近年、古代文化におけるエピファニーに関しては、文学、美術史、宗教学などを総合した論考が刊行され、隣接分野の研究を融合した考察の場が形成されつつある。

では、ギリシア美術史学において、確実に「夢」を視覚化した図像と認めることができるのは、どのような場面だろうか。その一つとして、眠る人物が、夢の中で治療を受けている例（医神アスクレピオスや、英雄アンフィアラオスによる治療の場面を描写した、奉納浮彫など）が挙げられよう。

本報告では、作例として、英雄アンフィアラオスの治癒の場面（《奉納浮彫》アテネ国立考古博物館 収蔵番号 3369 番）を中心に、視覚芸術における、「夢」の表現の図像解釈と、視覚的な記述（ビジュアル・ナラティブ）の特徴を考察する。

この奉納浮彫は、英雄アンフィアラオスの聖域「アンフィアレイオン」（オロポス）で出土、制作年は前 400～375 年頃と推定される。銘記により、アルキノスがアンフィアラオスへ奉納したことが判明している。伝統的な奉納浮彫と異なり、眠る患者（奉納者）の傷口を、蛇の姿の英雄が治癒する、極めて珍しい描写がみられる。奉納者が複数回、画面に登場する、「異時同図法」の構成をとることも注目し得る。「眠る」人物と夢の場面については、中世～初期ルネッサンス美術の作例等も参照して、分析を試みたい。

ヘレニズム時代になると、「眠り」を表す彫像は、《眠るアリアドネ》や《まどろむサテュロス》像など作例が増加し、それらは夢と何らかの関係を有すと推測可能であり、参考例として提示する。

夢の視覚表現の考察は、美術史学だけでなく、文学や歴史学や宗教学など、分野を横断して検討を進める必要がある。今回のフォーラムが、「夢」の視覚表現の検討の第一歩となればと考えている。

## 古代ギリシア医学における夢と癒し

木原 志乃（國學院大學）

前 5 世紀以降、エピダウロスをはじめギリシア各地に広まったアスクレピオス信仰において、「夢」による癒しが重視されたことは多くの碑文や文献に記されている。医神を祀る神殿が建てられた聖域（アスクレピエイオン）には病んだ嘆願者たちが訪れ、そこで彼らが眠っている間に見た夢によって、たちまち病が癒えたという奇跡譚が伝えられている。医神によるこのような

癒しの力は、ヒポクラテス派の人々による非宗教的で科学的な医学思想によって継承された。すなわち「夢」と「眠り」を通しての癒しとは、人間の認識を超えた神的な力でありながら、夢は患者の身体状態のあらわれであり、その自然的原因を知ることによって生理学的な治癒の方向を開示するものであったのである。ヒポクラテス文書には、いくつかの著作で夢の癒しの機能が語られているが、とりわけ『養生法について』(*De victu*)の第4巻「夢について」(*De somniis*)において、夢による予言の力が論じられた。この文書にはヘラクレイトスの影響が見られるが(彼もまた夢についての示唆的な言及を残しており、現代の精神医学者たちに注目された。Cf. B89DK)、「夢について」にはオルペウス教やバビロニアからの影響が指摘されており、夢を見る際の眠る身体と目覚めた魂の相関性についてなど、他の医学文書との関係も慎重に検討する必要がある。さらにヒポクラテス医学を継承したガレノスもまた、夢を重視したことで知られている。ガレノスが医学の道へ進んだことは、父親の見た「夢のお告げ」によることはよく知られたエピソードである。そしてヒポクラテス派同様、夢は病を癒す身体状態を示すものであり、夢に基づいて診断がなされていたことにも注目すべきである(*De dignotione ex insomniis*)。ガレノスはヒポクラテス派と比較してもアスクレピオス信仰が厚く、その宗教的側面と医学の自然科学的側面は決して矛盾することなく結びついていたのである。本発表ではこれら医学思想の展開を辿り、「夢」をめぐる神秘的癒しと、自然科学的・生理学的な癒しの両側面の関係がいかにかに語られてきたのかを考察する。いくつかのテキストにおいて、双方の緊張関係が保持されつつ、夢における神性を自覚的に取り込みながら治癒の思想が語られていることを明らかにすることを試みたい。

ローマ帝国の夢の世界：

アルテミドロス『夢判断の書』とその同時代的文脈

藤井 崇 (京都大学)

2世紀末から3世紀はじめに活躍したアルテミドロスの手になる『夢判断の書』が、フロイトやフーコーといった近現代の心理学者・思想家の大きな

関心を引いたことはよく知られているが、古代史の分野でも、『夢判断の書』は五賢帝時代と「3世紀の危機」の時代の社会と文化を映す鏡とみなされてきた。たとえば、『ギリシア人と非理性』で知られるドッズは、アルテミドロスが記録した夢を伝統的な秩序が失われていく時代の不安の象徴ととらえる一方、「古代末期」研究の潮流を作り出したブラウンは、『夢判断の書』のなかに従来の社会構造と規範の維持への強い志向を読み取った。本報告では、このアルテミドロスの『夢判断の書』を幅広くローマ帝政期（おおよそ前1世紀から3世紀までとする）のギリシア語圏に位置づけ、夢のあり方と当時の社会、文化、宗教との関係について、重要な論点を紹介したい。

写本を通じて現代まで伝わる文献史料には珍しく、『夢判断の書』には、都市名望家層や名家の子弟を含んだアスリートから、一般市民、女性、職人、農民、剣闘士、奴隷まで、さまざまな法的、社会的立場の人々が登場する。本報告では、まず、こうした多様な人々から構成されるローマ帝国ギリシア語圏で経験された夢に、どのような特徴があるのかを確認する。いうまでもなく、夢とローマ皇帝、ローマ帝国、ローマ文化との関係も、重要なテーマとなる。その上で本報告は、『夢判断の書』にあらわれる夢を、そのほかの史料、特に刻文史料で確認される夢と比較する。夢の原因論や夢における神々と人間との関係などが、主要な論点となるだろう。

## アレクサンドリアのフィロンにおける夢の位置付け

津田 謙治（京都大学）

キリスト教において、自らの許嫁マリアの懐胎を知ったヨセフに夢枕で現れた天使に関する福音書の記述は、救い主の到来を表すものであり、ここでは夢と救済史的出来事が密接に結び付いている。もっとも、新約文書全体を概観するならば、夢が特別な意義をもつのは上述のマタイ福音書や使徒行伝など一部の箇所のみであり、神が夢を通じて救済史に関わる在り方は、むしろ創世記における父祖たちの物語のように、ユダヤ教の聖書において頻繁に見出される。アブラハムの孫ヤコブは、双子の兄から逃れて伯父のところに向かう途中で眠りにつき、夢の中で神によって土地の獲得と子孫の繁栄を約

束される。ヤコブの子ヨセフは、夢とその解釈によって兄たちに妬まれ、結果的にエジプトで奴隷として売られるが、ファラオの夢を解き明かすことによってその信頼を得て、エジプトの地にイスラエルの民が繁栄する契機をもたらした。このように、創世記の父祖たちの物語において、夢は神が民を導くための重要な役割を担っている。他方で、民数記のモーセに関する記述においては、神は一般の預言者には夢と幻によって語るのに対し、モーセにだけは夢などを介さずに口から口へと言葉を与えるとされている。また、バビロン捕囚に向かう時代に活躍した預言者エレミヤの書には、夢を見て偽の預言をする者たちへの批判が見出される。ここでは、確かに神が夢を通じて民を導く在り方が通底しているものの、時代の変遷（聖書の正典史は複雑であり、単純に時代順に並べることは困難であるとしても）と共に夢の位置付けに変化が見出されるように見える。本発表では、さらに時代を降り、イエスとほぼ同時代に活躍したアレクサンドリアのフィロンが、ヘレニズム的思考の影響のもとで、上述の創世記における夢をどのように解釈したかを分析し、それによって初期ユダヤ教における夢概念の位置付けの一端を明らかにすることを試みる。